peepsが勝手に選ぶ

函館文化遺産

登録番号 85

まちの釣具屋

函 館市民、特に男性に向けて「趣味はなに？」と質問すれば、かなり高い頻度で返ってくる答えが「釣り」だ。それもそのはず。三方を海で囲まれ、家から車を少し走らせれば釣り場に行くことができる街。市民と釣りの距離感は、ほかの街に比べれば相当近くなるのも当然である。そんな釣り人たちを支えるのが釣具の専門店。かつては30〜40の個人専門店があったと言われているが、現在は10店にも満たないという。そんな中でも戦前に創業した万代町の『矢田釣具店』は、地元の釣り人たちが絶大な信頼を寄せるプロショップだ。

竿やリール、仕掛け、エサだけをとっても海釣り・川釣り・沼釣りとそれぞれのスタイルに合わせて揃え、さらに関連アイテムや道具のメンテナンス用品などが店の端まで並ぶさまは、まるで釣り具版のホームセンター。そのあたりは大手チェーン店にひけをとらない専門店ならではの強みを感じるが、それだけではない。店のホームページには、店主と社長自らが休日に釣り場をまわり、そこで聞いた釣果情報をこまめにアップ。さらにその情報はFMいるかの番組内へも長年提供し続けている。大手量販チェーン店には真似できない、地域密着の地元店のあるべき姿がここにある。

平日・週末問わず、常連客が来ると椅子に座り井戸端会議が始まる。これも地元店ならでは。「万代埠頭が目の前だから、釣りの最中に竿壊したとか、リール壊したって人は結構いるよ。竿ってのは折れることになってるから（笑）。高い竿ならアレだけど、安い竿が折れた程度ならその場でチャチャって直しちゃうけどね」。（店主）

昭和30年代、万代町に店を構えた当時の写真。戦前に商売を始めた当初はいか釣りの針先を専門に製造・販売する店で、昭和50年代頃から釣り具販売1本の専門店となった。

【矢田釣具店】
函館市万代町14-1
0138-41-6498

※peeps hakodate vol.76より一部内容を抜粋・流用。

BUS DRIVER JOB INFORMATION

Driver's Interview vol.1

「バス運転手」という仕事。

函館バス株式会社
運転手 菊地信彦（48歳）

前職はトラックドライバーだった菊地信彦さんが、函館バスの運転手に転身したのは8年前のこと。トラック仲間としてつながっていた知人の紹介でこの業界に入った。「バスの運転は『安心・安全でお客様を運ぶこと』が大前提。トラック時代は荷受時間の締切などもあって時間との勝負で。そういう意味では、いまは安全運転を優先して心にゆとりをもって仕事ができるのが嬉しいですね」。菊地さんの日々のモチベーションは、乗客から直接かけられる言葉だという。「降り際に『ありがとうね』とか『おつかれさま』と、お客様から直接声をかけていただくことって結構あるんです。その一言だけで『やってて良かった』と思えます。たまに観光バスの運転をすることもあるんですが、本当にお客様に喜んでいただけるんですよ。例えば函館山の夜景一つとっても必ずといっていいほど歓声や拍手が起きたり、夜景を見終えてバスを降りるときに感謝の言葉をかけてくださったり。函館のドライバーだからこそ味わえるやり甲斐だと思いますね」。

また函館バスでは、従業員の有給休暇の取得率が90％を超えており、従業員が休日の希望を出しやすい環境をつくっている。「例えば子どもの運動会などの学校行事のある日は、お休みの希望を出せば大抵全部行けます。もう前の仕事のときには考えられないくらい（笑）。あとは日々のシフトでも交番によっては中休みが数時間とれることがあって、その間は一旦家に帰ったり、個人的な用を済ませたりすることができる。すごく働きやすいですね」。